

トピック
H青少年のオリンピック・パラリンピックについての
学習経験と東京2020年大会への意識

笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 副主任研究員 武長 理栄・山田 大輔

2017年10月28日・11月29日に2020年東京オリンピック・パラリンピック大会開催まであと1000日という節目を迎え、様々なカウントダウンイベントが開催された。組織委員会は東京2020参画プログラムを全国各地で展開し、2017年12月1日時点でイベント数は2万件、参加人数は750万人を突破したと報告している。今後も大会に向けた機運醸成の取り組みがさまざまなアイデアのもとで企画・開催され、子どもたちのオリンピック・パラリンピックへの関心も高まっていくと予想される。

笹川スポーツ財団では、青少年のオリンピック・パラリンピックに関する意識の変化をとらえるべく、前回調査「10代のスポーツライフに関する調査2015」より、2020年東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望やボランティア実施希望に関する項目を継続的に調査している。今回、学校でのオリンピック・パラリンピックについての学習経験に関する項目を追加し、2015年からの観戦希望率・ボランティア実施希望率の動向とともに、学習経験の有無と観戦希望・ボランティア実施希望との関連性について検討した。

H-1

東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望率

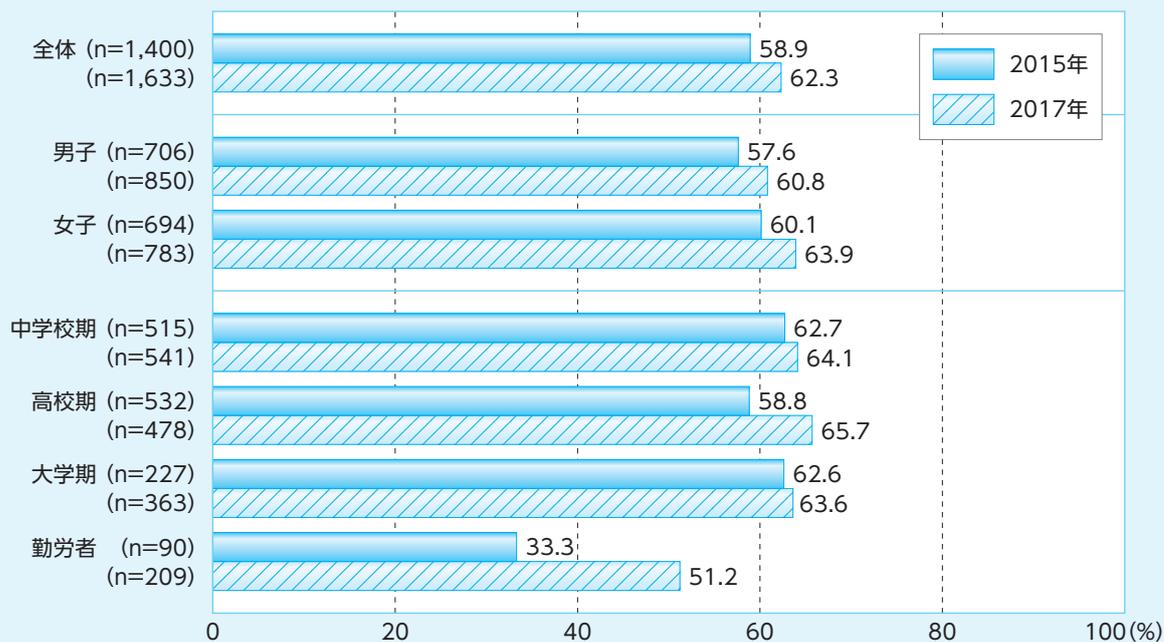
図H-1には東京オリンピック、図H-2には東京パラリンピックの12～21歳における直接観戦希望率の年次推移を示した。東京オリンピックの直接観戦希望率をみると、全体では62.3%であり、前回調査の2015年と比べて3.4ポイント上昇している(図H-1)。性別にみると、男子60.8%、女子63.9%であり、男女ともに2015年から3ポイントほど増加している。女子が男子を上回る傾向は2015年と同じであった。

学校期別にみると、高校期が65.7%と最も高く、次いで中学校期64.1%、大学期63.6%、勤労者51.2%であった。いずれの学校期でも2015年から希望率は上昇しており、勤労者では17.9ポイント、高校期では6.9ポイントの上昇がみられる。ただし、勤労者に関しては分析対象とした年齢は2015年調査では15～19歳であったが、

今回調査では15～21歳となり、サンプル数が大きく増加しているため、調査結果の解釈については留意が必要である。

東京パラリンピックの直接観戦希望率をみると、全体では39.2%であり、2015年から3.7ポイントの上昇がみられた(図H-2)。性別にみると男子35.8%、女子42.8%であり、いずれも2015年から上昇傾向にある。東京オリンピックと同様、男子よりも女子の方が観戦希望率は高いが、男女差はパラリンピックの方が大きく、女子が男子を7ポイント上回っている。

学校期別にみると、中学校期が43.6%と最も高く、次いで高校期41.2%、大学期37.2%、勤労者28.7%であった。中学校期、高校期、勤労者では観戦希望率の上昇がみられたが、大学期では低下した。

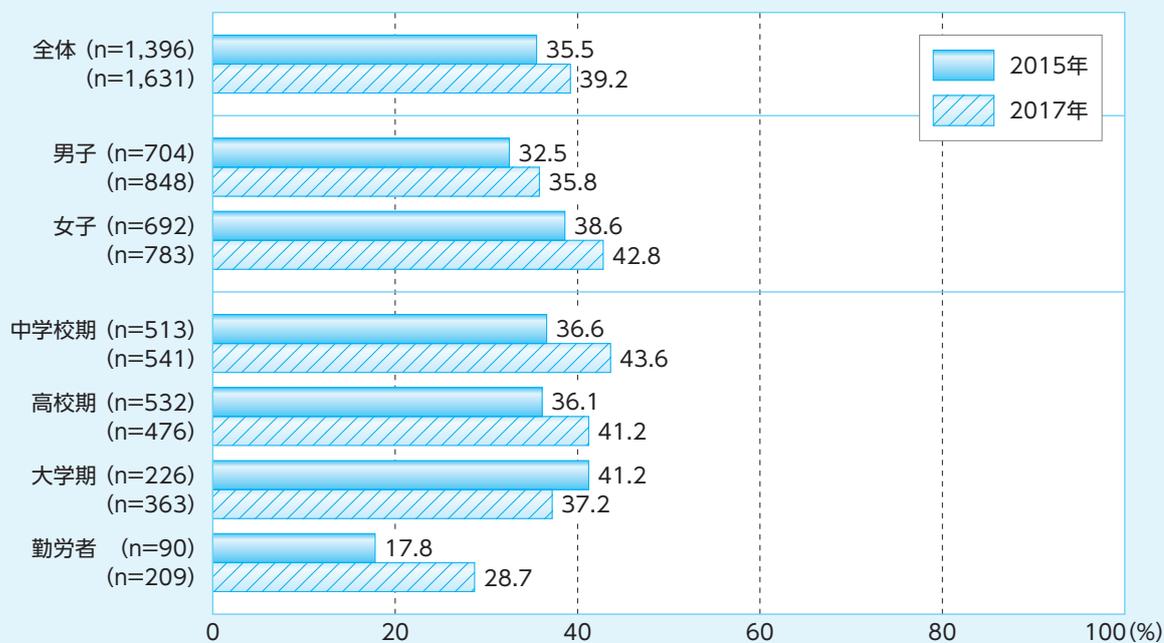


【図H-1】東京オリンピックの直接観戦希望率の年次推移(12～21歳:全体・性別・学校期別)

注1) 2015年調査は12～19歳まで、2017年調査は12～21歳までを分析対象としている

注2) 直接観戦希望率:「あなたは2020年東京オリンピックを直接スタジアムや体育館などの会場でみたいと思いますか」の問いに対する「そう思う」「ややそう思う」の回答の合計

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017



【図H-2】東京パラリンピックの直接観戦希望率の年次推移(12～21歳:全体・性別・学校期別)

注1) 2015年調査は12～19歳まで、2017年調査は12～21歳までを分析対象としている

注2) 直接観戦希望率:「あなたは2020年東京パラリンピックを直接スタジアムや体育館などの会場でみたいと思いますか」の問いに対する「そう思う」「ややそう思う」の回答の合計

資料: 笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

H-2

東京オリンピック・パラリンピックで直接観戦したい種目

東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望者に対し、観戦したい種目（開会式・閉会式を含む）を複数回答でたずねた。東京オリンピックの上位15種目をみると、全体では「バレーボール」が35.5%と最も多く、次いで「開会式」34.4%、「サッカー」34.1%、「野球」34.0%と続いた（表H-1）。性別にみると、男子では「サッカー」（44.2%）が最も多く、次いで「野球」「開会式」「陸上競技」「バスケットボール」であった。女子では「バレーボール」（45.9%）が最も多く、次いで「開会式」「体操」「水泳」「バドミントン」と続き、観戦したい種目は男女に違いが確認できる。

東京パラリンピックの上位15種目をみると、全体では「車いすバスケットボール」44.4%が最も多く、次いで「車いすテニス」29.7%、「開会式」25.8%、「陸上競技」22.6%、「閉会式」21.3%であった（表H-2）。「車いすバスケットボール」は、2位の「車いすテニス」を15ポイント近く上回っており、人気の高さがうかがえる。性別では、男女ともに1位「車いすバスケットボール」、2位「車いすテニス」であり、次いで男子では「陸上競技」「開会式」「視覚障害者5人制サッカー（ブラインドサッカー）」、女子では「開会式」「バドミントン」「閉会式」と続いた。

【表H-1】東京オリンピックで直接観戦したい種目（12～21歳：全体・性別：複数回答）

全体 (n=1,013)			男子 (n=516)			女子 (n=497)		
順位	種目	%	順位	種目	%	順位	種目	%
1	バレーボール	35.5	1	サッカー	44.2	1	バレーボール	45.9
2	開会式	34.4	2	野球	43.0	2	開会式	37.8
3	サッカー	34.1	3	開会式	31.0	3	体操	33.8
4	野球	34.0	4	陸上競技	28.3	4	水泳	31.6
5	バスケットボール	27.8	5	バスケットボール	27.9	5	バドミントン	31.0
6	卓球	27.3	6	卓球	27.3	6	閉会式	30.8
7	水泳	26.9	7	テニス	26.9	7	バスケットボール	27.8
8	閉会式	26.7	8	バレーボール	25.6	8	卓球	27.4
	陸上競技	26.7	9	閉会式	22.7	9	テニス	26.2
10	テニス	26.6	10	水泳	22.5	10	陸上競技	24.9
11	体操	26.3	11	体操	19.0	11	野球	24.5
12	バドミントン	23.4	12	バドミントン	16.1	12	サッカー	23.5
13	柔道	11.5	13	柔道	12.8	13	柔道	10.3
14	ソフトボール	8.9	14	ソフトボール	11.6	14	レスリング	9.1
15	レスリング	8.8	15	射撃	10.3	15	スケートボード	7.2

注1) 上位15種目のみ表示

注2) 開会式・閉会式を含む

資料：笹川スポーツ財団「12～21歳のスポーツライフに関する調査」2017

【表H-2】 東京パラリンピックで直接観戦したい種目(12~21歳:全体・性別:複数回答)

全体 (n=633)			男子 (n=302)			女子 (n=331)		
順位	種目	%	順位	種目	%	順位	種目	%
1	車いすバスケットボール	44.4	1	車いすバスケットボール	42.4	1	車いすバスケットボール	46.2
2	車いすテニス	29.7	2	車いすテニス	28.8	2	車いすテニス	30.5
3	開会式	25.8	3	陸上競技	24.2	3	開会式	27.8
4	陸上競技	22.6	4	開会式	23.5	4	バドミントン	23.0
5	閉会式	21.3	5	視覚障害者5人制サッカー (ブラインドサッカー)	22.2	5	閉会式	22.4
6	卓球	19.1	6	卓球	20.9	6	陸上競技	21.1
7	水泳	17.5	7	閉会式	20.2	7	水泳	19.9
8	バドミントン	16.9	8	水泳	14.9	8	卓球	17.5
9	視覚障害者5人制サッカー (ブラインドサッカー)	16.3	9	ウィルチェアーラグビー (車いすラグビー)	10.6	9	視覚障害者5人制サッカー (ブラインドサッカー)	10.9
10	ウィルチェアーラグビー (車いすラグビー)	8.7	10	バドミントン	10.3	10	シッティングバレーボール	9.4
11	射撃	7.6	11	射撃	8.9	11	アーチェリー	6.9
12	シッティングバレーボール	6.8	12	自転車競技	8.3	11	ウィルチェアーラグビー (車いすラグビー)	6.9
13	柔道	6.6	13	柔道	6.6	13	柔道	6.6
14	アーチェリー	6.3	14	アーチェリー	5.6	14	射撃	6.3
15	自転車競技	5.4	15	ゴールボール	5.3	15	馬術	4.8
							ボッチャ	4.8

注1) 上位15種目のみ表示

注2) 開会式・閉会式を含む

資料: 笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

H-3

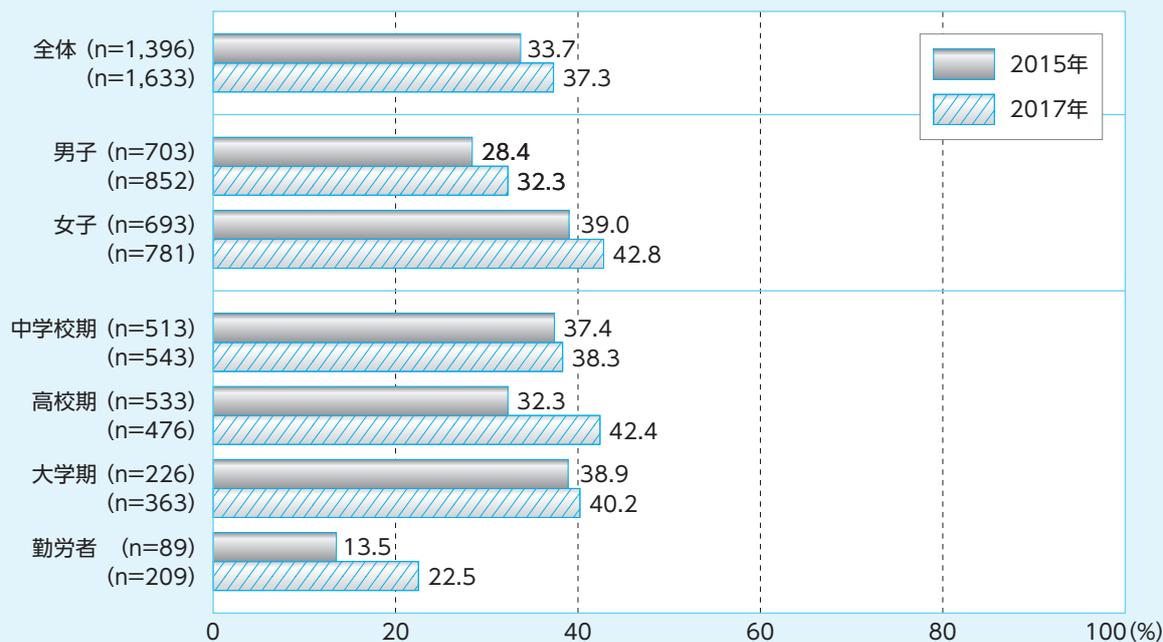
東京オリンピック・パラリンピックでのボランティア実施希望率

図H-3には東京オリンピック、図H-4には東京パラリンピックの12~21歳におけるボランティア実施希望率の年次推移を示した。

東京オリンピックでは、全体は37.3%であり、2015年から3.6ポイント上昇している(図H-3)。性別にみると、男子32.3%、女子42.8%と男子よりも女子の方がボランティアの実施希望率は高く、2015年と比較すると男女ともに実施希望率は上昇傾向にある。学校期別にみると、高校期が42.4%と最も高く、2015年の32.3%から10ポイント上昇している。

東京パラリンピックでは、全体は35.6%であり、2015年の29.7%から上昇傾向にある(図H-4)。直接観戦希

望率や東京オリンピックでのボランティア実施希望率が3ポイント程度の上昇であったのに比べ、東京パラリンピックでは5.9ポイントと伸び率が高い。性別にみると男子31.1%、女子40.6%であり、東京オリンピックと同様、男子よりも女子の方がボランティアの実施希望率は高く、2015年と比較すると男女ともに実施希望率は上昇している。学校期別にみると、大学期40.8%が最も高く、次いで高校期39.7%、中学校期35.7%、勤労者22.1%であった。高校期は2015年から12.3ポイント上昇し、大学期と同程度まで伸びてきている。東京オリンピック・パラリンピックともに、ここ2年間において高校生のボランティアへの関心は著しく高まっていると期待できる。

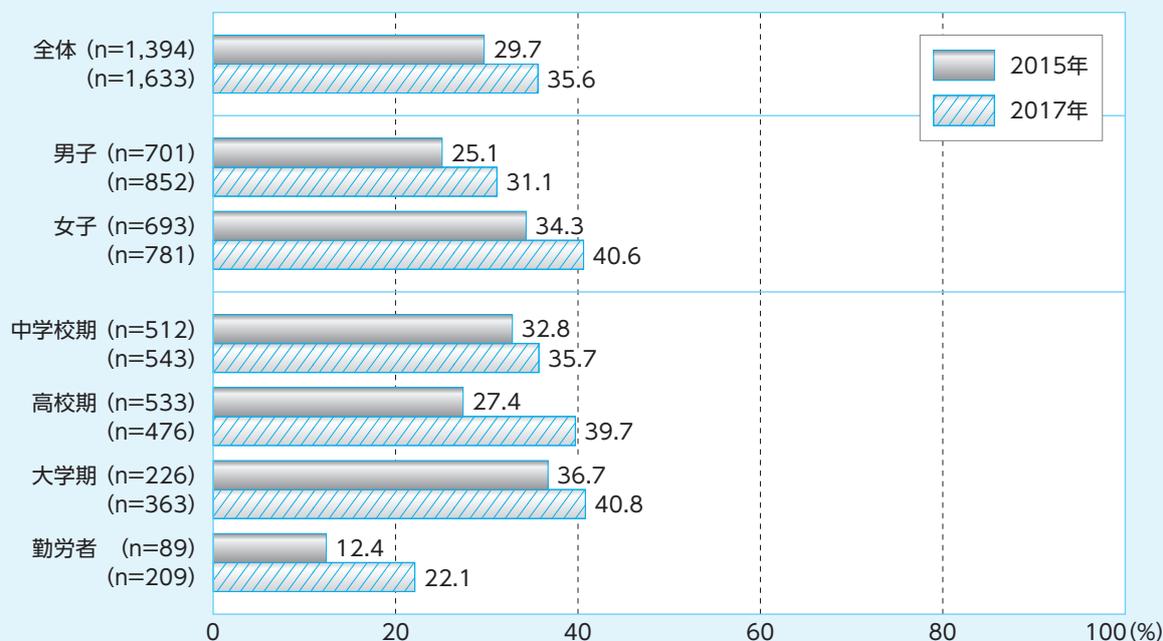


【図H-3】東京オリンピックでのボランティア実施希望率の年次推移(12~21歳:全体・性別・学校期別)

注1) 2015年調査は12~19歳まで、2017年調査は12~21歳までを分析対象としている

注2) ボランティア実施希望率:「あなたは2020年東京オリンピックで大会開催の手伝いや世話などのボランティア活動をおこないたいと思いますか」の問いに対する「そう思う」「ややそう思う」の回答の合計

資料: 笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017



【図H-4】東京パラリンピックでのボランティア実施希望率の年次推移(12~21歳:全体・性別・学校期別)

注1) 2015年調査は12~19歳まで、2017年調査は12~21歳までを分析対象としている

注2) ボランティア実施希望率:「あなたは2020年東京パラリンピックで大会開催の手伝いや世話などのボランティア活動をおこないたいと思いますか」の問いに対する「そう思う」「ややそう思う」の回答の合計

資料: 笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

H-4

運動・スポーツ実施状況と観戦希望率・ボランティア実施希望率との関連

表H-3に運動・スポーツ実施レベル別にみた東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望率とボランティア実施希望率を示した。観戦については、オリンピック・パラリンピックともに運動・スポーツ実施レベルが上がるにつれて観戦希望率も有意に高くなる。過去1年間に運動・スポーツを全く行っていないレベル0と、週5回以上・1回120分以上・運動強度「ややきつい」以上のレベル4との観戦希望率の差は約30~40ポイントとなり、特にオリンピックにおいて観戦希望率の差が大きい。

ボランティアについては、パラリンピックでの実施希望率がレベル2からレベル3にかけて若干落ち込むが、観戦希望率と同様、オリンピック・パラリンピックともに運動・スポーツをよく行っている青少年ほどボランティアを行いたいと回答する割合が有意に高かった。レベル0とレベル4との実施希望率の差は、オリンピック・パラリンピックともに26ポイントであり、大会別で違いはみられなかった。

【表H-3】 運動・スポーツ実施レベル別にみた東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望率とボランティア実施希望率(12~21歳)

		レベル0	レベル1	レベル2	レベル3	レベル4		
		n (%)						
直接観戦希望率	東京オリンピック	270 (38.5)	259 (56.4)	336 (59.2)	323 (70.0)	445 (76.9)	$\chi^2=157.971, df=16, p<0.001$	
	東京パラリンピック	270 (19.3)	258 (34.5)	335 (39.1)	323 (47.7)	445 (47.9)	$\chi^2=89.347, df=16, p<0.001$	
ボランティア実施希望率	東京オリンピック	270 (20.7)	259 (31.7)	337 (39.2)	322 (40.4)	445 (47.0)	$\chi^2=94.962, df=16, p<0.001$	
	東京パラリンピック	270 (18.5)	259 (29.3)	337 (39.8)	322 (38.5)	445 (44.5)	$\chi^2=96.253, df=16, p<0.001$	

資料：笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

COMMENTS

- オリンピック・パラリンピックは大きな目標ですが、平素から運動習慣を育てること、運動しやすい環境を整えることは、それ以上に大事です。また、スポーツを後押しする施策、予算配分、誰でもが気軽に参加しやすい環境、知識や交流を得やすくしていくこと。これこそが文化であり、国民の健康増進につながり、国力となると考えます。(17歳男子の父親)
- 2020オリンピック・パラリンピックの開催を身近に感じることで、スポーツを通じて人との交流を深めていける機会にしてほしいと思う。(14歳女子の母親)
- 東京オリンピック・パラリンピックまであと3年。10代の代表選手が一流アスリートとして活躍している姿を子どもたちがどのようにみるのかも楽しみです。マイナーな競技にも、もっとスポットライトがあたり、広まっていくといいと思います。(7歳男子の母親)

資料：笹川スポーツ財団「4~11歳のスポーツライフに関する調査」2017、「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

H-5 学校でオリンピック・パラリンピックについて学んだ経験

過去1年間に学校の授業でオリンピック・パラリンピックについて学んだ経験があるかどうかをたずねた。オリンピックについて学んだ経験は、全体で「あり」28.5%、「なし」52.0%、「わからない」19.5%であり、パラリンピックについて学んだ経験は、全体で「あり」23.6%、「なし」56.5%、「わからない」19.9%であった。また、過去1年間にける学校での障がい者スポーツ体験の有無をたずねたところ「あり」4.9%、「なし」88.9%、「わからない」6.2%であった。

これらの経験の有無と、東京オリンピック・パラリンピックの直接観戦希望率、ボランティア実施希望率との関連をみた結果を表H-4に示した。いずれの経験も、経験ありの方がなし・わからないと回答した者よりも直接観戦希

望率やボランティア実施希望率は高く、有意な差が認められた。東京オリンピックは、学校での学習経験の有無に関わらず、観戦したいと思う割合は6割を超えるが、東京パラリンピックは学習経験なしの場合、観戦希望率は37.5%に留まる。ボランティア実施希望率はオリンピック・パラリンピックの学習経験の有無による差はさらに大きく、経験ありとなしでは17~20ポイントの差がみられる。また、障がい者スポーツの体験者は、6割が東京パラリンピックの観戦を希望しているが、未体験者の観戦希望率は4割であった。

オリンピック・パラリンピック（障がい者スポーツ）について知る・体験するといった活動は、特にボランティアやパラリンピックへの関心を高めていると考えられる。

【表H-4】過去1年間に学校でオリンピック・パラリンピックについて学んだ経験と直接観戦・ボランティア実施希望率(12~21歳)

(%)

		直接観戦希望率		ボランティア実施希望率		
		東京 オリンピック	東京 パラリンピック	東京 オリンピック	東京 パラリンピック	
オリンピックについての学習経験	あり(n=396)	73.0	-	-	-	$\chi^2=29.571,$ df=8, p<0.001
	なし(n=721)	61.3	-	-	-	
	わからない(n=270)	60.4	-	-	-	
パラリンピックについての学習経験	あり(n=327)	-	52.3	-	-	$\chi^2=37.133,$ df=8, p<0.001
	なし(n=783)	-	37.5	-	-	
	わからない(n=276)	-	37.3	-	-	
オリンピックについての学習経験	あり(n=395)	-	-	53.4	-	$\chi^2=51.679,$ df=8, p<0.001
	なし(n=723)	-	-	36.4	-	
	わからない(n=270)	-	-	30.7	-	
パラリンピックについての学習経験	あり(n=327)	-	-	-	54.1	$\chi^2=66.502,$ df=8, p<0.001
	なし(n=786)	-	-	-	34.1	
	わからない(n=276)	-	-	-	31.5	
障がい者スポーツ体験	あり(n=67)	-	61.2	-	-	$\chi^2=32.396,$ df=8, p<0.001
	なし(n=1,233)	-	41.2	-	-	
	わからない(n=86)	-	22.1	-	-	
障がい者スポーツ体験	あり(n=68)	-	-	-	45.6	$\chi^2=47.340,$ df=8, p<0.001
	なし(n=1,235)	-	-	-	39.3	
	わからない(n=86)	-	-	-	18.6	

資料：笹川スポーツ財団「12~21歳のスポーツライフに関する調査」2017

本稿では、2015年からの東京オリンピック・パラリンピック観戦希望率・ボランティア実施希望率の変化とともに、オリンピック・パラリンピックについての学習経験の有無と観戦希望・ボランティア実施希望との関連性について検討した。

その結果、東京オリンピック・パラリンピックともに直接観戦率・ボランティア実施希望率は2015年から上昇傾向にあり、12~21歳の青少年の2020年大会への関心は高まっている状況が明らかとなった。しかし、パラリンピックに関しては、オリンピックと比べて観戦希望率は20ポイントほど低く、2015年からその差に変化はみられなかった。

一方、ボランティアの実施希望率はオリンピックとパラリンピックであまり差がみられず、2015年からの差は縮小傾向にある。つまり、パラリンピックを観戦したい青少年は、オリンピックよりは未だ少ないが、ボランティアを試みたいと思う青少年の割合は、ここ2年で両大会が同程度に近づいている。

パラリンピックの関心を高める取り組みは、東京2020組織委員会をはじめ、日本財団パラリンピックサポートセンター（パラサポ）や早稲田大学、日本体育大学などによって全国各地で、また東京都教育委員会によって都内すべての公立学校で実施されている。このような取り組みが、青少年のボランティア参加への意識の向上につながっていると推察される。

<参考文献>

笹川スポーツ財団（2015）青少年のスポーツライフ・データ2015-10代のスポーツライフに関する調査報告書-

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会，東京2020参画プログラム，
<https://participation.tokyo2020.jp/>

東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会，東京2020教育プログラム，
<https://tokyo2020.jp/jp/get-involved/education/>

日本財団パラリンピックサポートセンター，「あすチャレ!スクール」
<https://www.parasapo.tokyo/>

本調査では、東京パラリンピックで観戦したい種目として、しばしばメディアで取り上げられる「車いすバスケットボール」や「車いすテニス」が上位を占め、その他では開会式や閉会式といったセレモニーが上位にランクインした。今後は、障がい者スポーツの様々な種目の認知度を高め、実際に会場に赴いて競技を観戦したいと思えるような取り組みが求められる。メディアを通して競技を観戦したり、実際に障がい者スポーツを体験したりといった活動は有効であり、単にパラリンピックを知るだけでなく、障がい者スポーツについて深く学ぶ機会が重要になると期待される。

また、普段運動・スポーツをよくしている青少年ほど、東京オリンピック・パラリンピックを会場で観戦したい、ボランティアとして参加したいと思う割合が有意に高い結果も示された。「する」のみならず「みる」「ささえる」活動を楽しむ人々の増加は、スポーツを文化として捉える社会の実現につながり、今後、東京オリンピック・パラリンピックを契機として、スポーツに関わりが少ない子どもたちの関心を高めていく方策立案運用こそが求められる。